

# 小説フレームアームズ・ガール第5話

## 「シオンとステラ」

### 1. 怒りと憎しみの連鎖

皇帝ヴィクターが死亡した事で大混乱状態に陥ったグランザム帝国軍は、一斉に城下町へと撤退。それにより今回の戦闘はルクセリオ公国騎士団の勝利という形になる。

皇帝不在となったグランザム帝国に対しての、降伏勧告や和平交渉などの政治的な問題が未だに残されているが、それは戦いを終えた現場の兵士たちの仕事ではない。国王であるジークハルトら閣僚の人間がやるべき仕事だ。

生き残ったルクセリオ公国騎士団の兵士たちが、一斉にビスマルクへと帰還していく。

これで10年も続いた今回の下らない戦争が、終わりを迎えてくれれば・・・兵士たちの誰もがそんな想いを胸に抱いていた。

そしてそれはシオンの命令で戦場を早々に離脱した、シオン隊の者たちも例外ではない。

暴走したステレットがマチルダを斬った際に、ステレットの中に僅かに理性が残されていたからなのか、マチルダの傷は辛うじて急所から外れており・・・それが幸いして何とかマチルダは一命を取り留めたようだ。

マチルダを緊急手術した医師の話によると、シオンとアーキテクトの迅速かつ的確な応急処置のお陰だとの事だ。それを伝えられたオスカルたちは、誰もが安堵の表情を見せたのだった。

今は集中治療室で眠っているが、取り敢えず危険な状態からは脱したと言えるだろう。

敵であるアーキテクトにマチルダの命を救われたという事で、オスカルは何とも複雑な思いを抱いているようなのだが。

「おお、お前たち、無事だったか。」

指令室でシオンからの通信を心配そうに待ち続けているオスカルたちの前に、パワードスーツを身に纏った中年の男性が話しかけてきた。

かつてシオンが所属していたアルフレッド隊の隊長であり、これまで数多くの戦果を挙げてきた名将・・・アルフレッド・ギルマン大尉だ。

彼の姿を確認したオスカルたちは、一斉にアルフレッドに敬礼をする。

「事情はキサラギ軍曹から聞かせて貰った。シオンが不在につき、現時刻をもってお前たちは暫定的に私の指揮下に入れ。」

「「「「「「了解！！」」」」」」」」」」」」

「それと正式な任官手続きはまだ先になるが、キサラギ軍曹の曹長への昇進、アレン上等兵の伍長への昇進、そしてシオンの大尉への昇進が正式に決まったようだ。特にアレン上等兵は、我が軍における最速の昇進記録らしいぞ。」

マチルダは前回の戦闘で、ステレットを撃墜した功績が認められたのだ。いつまでも上等兵のままにしておくのは勿体ないと上層部が判断したに違いない。

そのマチルダが集中治療室で眠っている事を、アルフレッドはとても残念に思っていたのだが。

「まあそれはそれとして、キサラギ軍曹。シオンとは未だに連絡が取れないのか。」

「はい、シオン隊長が通信機の電源を切ってからというもの、未だにまだ・・・。」

「何を考えているのだ、あの馬鹿は・・・。まあいい、連絡が取れないならこちらから出向くまでだ。奴は今もゼピック村でフレームアームズ・ガール共と一緒にいるのだな？」

「はい、そのはずです。」

「よし。ならばお前たちは、今から私と共にゼピック村へと出撃だ。シオンの救出と同時に、フレームアームズ・ガール共を抹殺する。」

アルフレッドがオスカルたちに対して、威風堂々と告げたのだが。

「この艦の防衛の為に私の部下をここに残しておくが、キサラギ軍曹は念の為に索敵と対空監視を怠るな。戦闘が終わったとはいえ、帝国軍の残存部隊が潜んでいるかもしれないからな。」

「ちょ、ちょっと待って下さいギルマン大尉！！」

「どうした、キサラギ軍曹。」

アルフレッドの命令を聞いたナナミが、とても不安そうな表情になったのだった。

「シオン隊長は仰っていました。リーズヴェルト少尉を救う事に集中したいから通信を切ると。」

「だから何だ？」

「シオン隊長は洗脳された彼女を救おうと、今も必死に戦っているはずなんです。それを抹殺するなんて、シオン隊長がどう思うのか・・・！！」

「・・・キサラギ軍曹。奴の意思が我が軍の・・・いや、我が国の総意なのか？」

「そ・・・それは・・・。」

「それに私は奴の上官だ。お前は上位命令に逆らうつもりなのか？」

昇進が決まったとはいえ、それでも任官手続きがまだ済んでいない以上は、シオンの階級は今も中尉のままだ。軍隊である以上、大尉であるアルフレッドの命令の方が絶対なのだ。

それにスティレットたちフレームアームズ・ガールによって、ルクセリオ公国騎士団がどれ程の打撃を受けたのか・・・どれだけの死者を出したのか。

そして戦死した兵士たちの遺族の、スティレットたちへの怒りと憎しみ、そして悲しみ・・・そんな彼らの無念を思えばこそ、スティレットたちを「救う」など、アルフレッドは到底納得するわけにはいかないのだ。

「奴らフレームアームズ・ガールたちにどんな事情があるのかは知らんが、それでも我々にとって奴らが危険な存在である事には変わりはない。それに奴らによって我々は多くの同胞を失った。だからこそ、この機に乗じて我々が奴らを討たねばならんのだ。」

「ギルマン大尉・・・ですが・・・！！」

「話は以上だ。これ以上の反論は認めんぞ。総員直ちに出撃の準備をしろ。何としても奴らを我々の手で抹殺し、孤軍奮闘しているシオンも救助するのだ。いいな？」

ナナミと同様に納得が行かないといった表情のオスカルたちだったが、それでも上位命令に逆らう訳にもいかず、渋々と出撃の準備をする。

ヴィクターが死亡し、グランザム帝国軍は撤退した。これでもう10年も続いたこの戦争は、終わりを迎えるはずなのに・・・それでも尚、怒りと憎しみの連鎖は止まらないのか。

しかもスティレットは除隊申請を出したのに、それを拒否されて洗脳され、ヴィクターに無理矢理戦わされていただけに・・・それでもアルフレッドはスティレットを、危険だからという理由で抹殺対象にするというのだ。

『リニアカタパルト起動、パワードスーツ全システムオールグリーン。発進シークエンスをギルマン大尉に譲渡します。』

ナナミは艦内放送をしながら、必死にシオンとの通信を試みようとするが・・・それでも未だにシオンとの通信は繋がらない。

シオンは今も、暴走したスティレットを救う為に必死に戦っているのか。それとも救う事に成功したのだろうか。

そのスティレットをアルフレッドが抹殺しようとしていると知れば、シオンはどう思うのだろうか。この緊急事態をシオンに伝えたいのに・・・伝えられない事がナナミにはもどかしい。

もしシオンが、スティレットたちの抹殺を企てるアルフレッドに反発し、スティレットたちを守る為に軍を辞める・・・そんな事になってしまったとしたら・・・。

想像しただけで、ナナミは思わずゾッとしてしまった。  
そんな事は、とてもナナミには耐えられなかった。

『・・・進路クリア。アルフレッド臨時小隊、発進どうぞ。』

「これよりフレームアームズ・ガール共を抹殺する！！アルフレッド臨時小隊、出るぞ！！」

「「「「「了解！！」」」」」」

不安を隠し切れないナナミからの艦内放送を合図に、アルフレッドたちはゼピック村へと出撃したのだった。

## 2. 守る為の覚悟

かつて、自分が両親と共に暮らしていた自宅・・・そこに足を踏み入れたスティレットは、5年ぶりの懐かしい光景に思わず目を潤ませたのだった。

玄関のすぐ先にある居間・・・5年前のあの日、あそこで皆で楽しそうに、スティレットの誕生日パーティーを開いていたのだ。

帝国軍の新兵器の暴走により、完全に吹き飛ばされてしまった居間は滅茶苦茶に散らかってしまっており、スティレットが誕生日プレゼントとして父から貰った大きな熊のぬいぐるみが、すっかり焼け焦げてボロボロになって床に転がってしまっている。

2階に上がり、スティレットの自室に入ると・・・そこは新兵器の直撃を免れたからなのか、何とか綺麗な状態を保ったまま放置されていた。

大量のぬいぐるみが置かれた、年頃の女の子らしい部屋・・・机の上にはスティレットのやりかけの小学校の宿題が放置されている。

そして液晶テレビに繋がれていたのは、父に買って貰った当時の最新鋭のゲーム機だ。

何もかも懐かしい光景・・・そしてここでの幸せの日々を、スティレットはグランザム帝国軍によって理不尽に奪われたのだ。

そして記憶を消され、何も知らないまま命の恩人であるシオンとの戦いを強要させられ、戦いを拒絶したら今度は洗脳までされたのだ。これが理不尽と言わずに何と言えればいいのか。

身体を震わせるスティレットの肩を、シオンがそっ・・・と優しく抱き寄せた。

「シオンさん、私、もう帝国になんか帰りたくない！！お願い、私たちをルクセリオ公国に連れてって！！」

何の罪も無い両親と親友を理不尽な理由で虐殺し、ステイレット自身もここまで自分の人生を台無しにされたのだ。ステイレットがシオンの傍にいる為に、ルクセリオ公国への亡命を願うのは当然かもしれないが。

だが必死の表情で懇願するステイレットに、シオンは首を横に振った。

「・・・いや、それは駄目だステラ。今更君たちを城下町に連れて行った所で、待っているのは恐らく君たちの処刑だろう。」

「そんな・・・！！」

「皇帝ヴィクターが死んで、戦争はひとまずの終結を迎えた・・・だけど今頃軍の上層部は、君たちをどうやって抹殺するかを必死に考えているんじゃないかな？」

これまで不殺を貫いてきたステイレットはともかくとして、アーキテクトたちはルクセリオ公国騎士団の兵士たちを、戦場で何人もその手で殺してきたのだ。

いや、そのステイレットも暴走していたとはいえ、味方であるはずのグランザム帝国軍の兵士たちを大量虐殺したのだ。それにステイレットはグランザム帝国軍最強の剣士だ。軍の上層部はステイレットこそが一番の危険人物であると考えているに違いない。

戦場に出るからには、兵士というのは単なる一戦闘単位に過ぎない。だから殺そうが殺されようが文句を言われる筋合いなど無い。殺人罪など当然適用されるはずがない。

これはシオンもステイレットたちも士官学校で、教官から散々しつこく教え込まれた事なのだが・・・それでも遺族たちの感情、そしてステイレットたちの脅威を考えれば、そんな悠長な事など言っていられないというのが、軍の上層部たちにとっての本音なのだろう。

ステイレットたちをグランザム帝国に返す訳にもいかず、かと言ってルクセリオ公国に連れていく訳にもいかない・・・シオンは完全に八方塞がりな状況になってしまっていた。

これから一体、ステイレットたちをどうやって守っていけばいいのか・・・頭を悩ませていたシオンだったのだが。

「ならばシオン。私に提案がある。」

アーキテクトがシオンに提案したのは、その場にいた誰もが考えてもいなかった事であった。

「私たち5人で、今からコーネリア共和国に亡命するのだ。あの国は絶対中立、そして一切の差別行為を禁じているからな。」

「な・・・コーネリア共和国への亡命！？」

アーキテクトの提案に、驚きを隠せないシオン。

いや・・・確かに今の状況でステイレットたちを守るには、それしか方法が無いのかもしれない。

アーキテクトが言うように、コーネリア共和国は絶対中立・・・そしていかなる理由があろうとも差別行為は一切禁じられている。

だから暴走していたとはいえグランザム帝国軍の兵士たちを大量虐殺してしまったステイレットも、コーネリア共和国でなら白い目で見られる事無く、穏やかに暮らしていける・・・確かにアーキテクトの言う通りなのかもしれないが。

「最もこれはお前に、あまりにも理不尽で重い決断をさせる事になってしまうがな。」

「アキト……。」

「私たちは今更帝国に対して何の未練も無い……だがお前にとってコーネリア共和国への亡命は、結果的にルクセリオ公国に対しての裏切りも同然だ。」

「……。」

「それでもお前は来るか？ 私たちと共に、コーネリア共和国へ。」

あそこまでスティレットを理不尽に苦しめ、シオンを殺す為の使い捨ての駒として扱い、自分たちも散々コケにしたのだ。

アーキテクトたちはグランザム帝国を裏切る事に、今更何のためらいも無かった。

だがシオンにとっては、あまりにも重い決断である事は間違いない。

コーネリア共和国に亡命するという事は、幼少時に自分の命を救ってくれたジークハルトを裏切る事になり、自分の大切な部下であるマチルダたちを……いや、ルクセリオ公国その物を敵に回す事を意味するのだから。

それを理解しているからこそアーキテクトは、シオンに対してコーネリア共和国への亡命を無理に強要したりはしなかった。

何なら自分たち4人だけでコーネリア共和国に亡命し、シオンだけは一旦ルクセリオ公国に戻るという選択肢もある。

皇帝ヴィクターが内乱の末に死亡した事で、この10年も続いた戦争もひとまずは終結を迎えるはずだ。落ち着いたらまたシオンとスティレットが会う機会も作れるのではないか……そうアーキテクトは考えていたのだが。

「……僕も君たちと一緒に行くよ。アキト。」

それでもシオンは決断した。

ルクセリオ公国騎士団シオン隊隊長として、中尉として……あまりにも重い決断を。

それはスティレットを守りたいから。今度こそスティレットを助けたいから。

それに晴れて恋人同士になったスティレットと今更離れ離れになるなど、今のシオンには到底耐えられなかった。

例えそれによって、ルクセリオ公国の人々を裏切る事になったとしても。

スティレットを守るには、最早コーネリア共和国への亡命しか手が残されていないのだ。

「……本当にいいんだな？ シオン。」

「君の言うようにステラを守るには、もうそれしか方法が無い。それに僕はもう後悔だけはしたくないから。今度こそステラを守りたいから……例え世界中を敵に回したとしても。」

「分かった。ならば今からコーネリア共和国への正式な亡命手続きを進めよう。」

端末を取り出したアーキテクトがコーネリア共和国の公式サイトにアクセスし、オンラインでコーネリア共和国への亡命手続きを進めた。

契約事項に同意した上で、シオンたち5人のサインと、指紋による生体認証を済ませた上で、送信ボタンを……

「……うお！？」

押した数秒後に、アーキテクトのスマートフォンに着信音が鳴り響いた。

「こちらアーキテクト・オラトリオ大尉だ。コーネリア共和国軍か？」

『はい！！エミリア様の専属秘書を務めさせて頂いております、マテリア・アーカイブと申します！！エミリア様からのご命令で、先程から皆さんの事をずっと見守っていました！！』

「・・・見守る・・・か。私たちの『監視』の間違いではないのか？」

このゼピック村は帝国領とはいえ、それでもコーネリア共和国の国境のすぐ近くなのだ。

だからこそ中立国のコーネリア共和国軍が、ここで戦闘を行っているルクセリオ公国騎士団とグランザム帝国軍が何かの拍子に自国の領地内に入ってしまった時に、いつでも迎撃が出来るように戦闘準備を進めておくのは、確かに間違いではないのかもしれないが。

「・・・いいや、私たちは貴国に亡命を申請した立場だったな。敢えて深入りはすまい。今の失言を詫びさせてくれ。」

『いいえ、そんな事はどうでもいいんです！！それよりも皆さんの亡命申請を確かに正式に受理しました！！直ちに輸送艦フェニックスを指定のポイントに向かわせます！！』

シオンの端末に、このゼピック村からそう遠くない場所の、国境沿いのポイントの座標が示された。全力で飛べば、ここから5分も掛からないような距離だ。

『ただし皆さんもご存じでしょうが、私たちコーネリア共和国は絶対中立・・・ここから直接皆さんの所に救助に行く事は出来ません！！』

「ここまで輸送艦を飛ばせば、帝国への不当な領地侵犯になってしまうからだな？」

『だからお願い・・・何とか自力で辿り着いて下さい！！私たちの所に！！』

「了解した。必ず5人揃って辿り着くと貴官に約束しよう。」

マテリアと通話をするアーキテクトだったが・・・話している内に、ふと思い出した。

「・・・貴官は確かマテリアと言ったな？そう言えばステラがシオンと共にコーネリア共和国に墜落した際に、貴官の事を心配していたが・・・」

『はい、ステラちゃんには一度、命を救われた事があったんです！！それでステラちゃんに勧められて、私はコーネリア共和国に亡命を・・・！！』

「そうか。だが積もる話は後にしよう。」

ステイレットの知り合いという事もあって興味深くはあるが、それでも今はそんな悠長な事を言っ  
てられる場合ではないのだ。

もしかしたらルクセリオ公国騎士団がシオンの救助を兼ねて、自分たちを抹殺に来るかもしれないし、無理矢理洗脳されたステイレットの容態も気がかりだ。

「貴官もそこで私たちを見ていたならば理解していると思うが、ステラは皇帝ヴィクターに無理矢理洗脳され、さらに暴走までも引き起こした。洗脳維持装置をシオンが破壊してくれたお陰で今は正気に戻っているが、それでもステラの脳に深刻な後遺症が残っている可能性もある。」

『はい、ステラちゃんをすぐに診れるように、医療スタッフを既にフェニックスに待機させています！！だから安心して下さい！！』

「貴官の善意に多大なる感謝を・・・今から直ちにそちらに向かう。」

『オラトリオ大尉・・・それに皆さんも・・・どうかご武運を！！』

マテリアとの通話を切ったアーキテクトは、決意の表情でシオンたちに向き直った。

そしてシオンたちもまた、決意の表情でアーキテクトに頷く。

亡命申請を正式に済ませた以上、シオンはもういよいよ後戻りが出来なくなってしまった。だがそれでもシオンは、スティレットたちと共にコーネリア共和国に行かねばならないのだ。スティレットを守る為に…今度こそスティレットを救う為に。それによってルクセリオ公国を…ジークハルトやマチルダたちを裏切る事になったとしても。

「…行ってくるね。パパ…ママ…アスナちゃん…アスカちゃん…！！」

家の外に出たスティレットは涙目になりながら、すっかりボロボロになってしまった…かつて両親と幸せに暮らしていた自宅を見つめていた。

だが今はそれでも、昔の事を懐かしんでいられる場合ではない。

全てを捨ててまで、国を裏切ってまで自分の事を守ろうとしてくれている…そんなシオンの想いに報いる為にも、必ず生きて無事にコーネリア共和国に辿り着かなければならないのだ。

「ステラは僕が必ず守ります…必ず！！」

そんなスティレットの肩を抱き寄せながら、シオンは決意の表情で、スティレットの自宅に向けて敬礼をした。

その瞬間、スティレットたちのフレームアームに鳴り響く、自分たちがロックオンされた事を示す警告音。

「総員撃ち方始めえー—————っ！！」

アルフレッドの号令と共に、上空からオスカルたちが一斉にビームマシンガンを掃射してきた。それをビームシールドで受け止めるスティレットたち。そしてシオンもまた…ビームマシンガンでアルフレッドたちを牽制したのだった。

「何iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiっ！？」

全く予想もしていなかったシオンの攻撃を、慌てて避けるアルフレッド。

そして地上に降り立ったアルフレッドは、自分にビームマシンガンの銃口を向けるシオンを怒りの形相で睨み付けた。

「アルフレッド大尉…！！」

「シオン！！この私に銃を向けるとは、貴様一体何のつもりだっ！？」

自分を怒鳴り散らすアルフレッドに対して、シオンもまた何の迷いも無い力強い瞳で、スティレットたちを庇うように立ちはだかつたのだった。

### 3. 本当に守りたい物

やはりアーキテクトが懸念していた通り、ルクセリオ公国騎士団がシオンの救助を兼ねて、自分たちの抹殺にやってきたようだ。

だがその任務を受けたのが、よりもよってシオン隊とは…こんな運命のいたずらがあつていいのだろうか。

コーネリア共和国への亡命を決意したその瞬間から、シオンはかつての部下と戦わなければならなくなってしまったのだ。シオンにとってこれ程残酷な現実は無いだらう。

先程のシオンの銃撃は、あくまでもアルフレッドたちへの牽制・・・殺すどころか当てるつもりさえも無かった事はアルフレッドも理解しているのだが、アルフレッドにとってそんな事は至極どうでもいい事だった。

シオンが味方であるはずの、しかも上官である自分に銃を向けた・・・アルフレッドはそれ自体を問題視しているのだ。

「シオン！！貴様まさか、その娘たちを庇い立てするつもりなのか！？」

「聞いて下さいアルフレッド大尉！！ステラたちは最早我々に害を成す存在ではありません！！彼女たちは・・・！！」

「その娘たちによって我々は、数多くの同胞を殺されたのだ！！それにその娘たちは極めて危険な存在だ！！生かしておけばいずれ我々に牙を向き、我が国にとって最大の脅威となるかも知れんのだぞ！？」

「アルフレッド大尉、ステラは皇帝ヴィクターに無理矢理洗脳されて・・・っ！！くそっ！！」

問答無用でスティレットにビームマシンガンを照射しようとするアルフレッドに、シオンはビームサーベルで斬りかかる。

とっさにバックステップでそれを避けるアルフレッドだが、シオンが本気だという事を理解し、いよいよ完全に頭に血が上ってしまったようだ。

「貴様あ！！抗命罪に問われないのかあっ！？私は貴様の上官なのだぞおっ！！」

「アルフレッド大尉・・・どうしてもステラたちを殺すというのですね！？」

「当たり前だ！！その娘たちは我々の敵なのだぞおっ！？」

「だったら・・・！！」

戦わずに済ませられるなら、話し合いで済ませられるなら、それに越した事は無かった。

だが運命というのは、一体どこまで非情だというのか。

アルフレッドはシオンの言い分にも、どうやら全く耳を傾けるつもりは無いようだ。それを悟ったシオンは、いよいよアルフレッドたちと本気で戦わなければならなくなってしまった。

アルフレッドが本気でスティレットたちを殺すつもりである以上、アルフレッドたちを倒さなければスティレットたちを守れないのだから。

覚悟を決めたシオンは、これまで電源を落としていた通信機を再起動した。

「・・・ナナミ。それにオスカルたちも聞いてくれ。今から僕は物凄く身勝手な事を言わせて貰う。」

『シオン隊長・・・まさか・・・！！』

「現時刻をもって僕はルクセリオ公国騎士団を退職する！！そしてステラたちと一緒にコーネリア共和国へと亡命する！！」

スティレットたちを守る為に、シオンが自分たちに敵対する・・・ナナミが恐れていた事態が遂に現実になってしまったのだ。

アルフレッドがスティレットたちの抹殺を命じたりなどしなければ・・・シオンの言葉に落ち着いて耳を傾けてくれれば・・・こんな事にはならなかったかもしれないのに。

『シオン隊長！！待っ・・・』

ナナミが涙目になりながら、必死にシオンを説得しようとした、その時だ。



『…ならんぞ。シオン。』

「陛下!？」

突然ジークハルトが、シオンとナナミの通信に割り込んできた。  
いきなりの事に、シオンたちは驚きを隠せない。

『大体の事情はキサラギ軍曹から聞かせて貰った。お前がその娘たちを守りたいというのであれば、その娘たちの身の安全と、国内における最低限の地位は保証しよう。』

「陛下…!!」

『その娘たちは帝国への謀反を宣言したらしいな。ならば我々はその娘たちを傷つける理由など最早何も無い。我が国に亡命したいというのであれば受け入れるつもりだ。』

「……。」

『だからお前は戻ってこい。シオン。我が国には…いいや、私にはお前が必要なのだ。』

皇帝ヴィクターが死に、戦争がひとまずの終結を迎えた上に、アーキテクトがグランザム帝国に対しての謀反を高々と宣言したのだ。

確かにジークハルトの言うように、これ以上ルクセリオ公国騎士団がスティレットたちを傷つける理由も、必要性も無いのかもしれないが。

「…いいえ、やはりそれは出来ません。陛下。」

だがそれでもシオンは、ルクセリオ公国に戻る訳にはいかないのだ。  
ルクセリオ公国では、スティレットたちを守る事が出来ないから。

「仮に陛下にそのつもりが無かったとしても、他の上層部たちは決してスティレットたちを許さないでしょう。現にアルフレッド大尉はスティレットたちを殺すと堂々と宣言しましたし、そもそもあの頭でっかちな大臣たちが、スティレットたちを見逃すとは到底思えません。」

『シオン…!!』

「食事に毒を盛られるかもしれない。入浴中や寝込みを襲われる事だってあるかもしれない。それに城下町の人々の中にも、元々帝国の人間であるスティレットたちに、強い敵意や殺意を持つ人だって大勢いるでしょう。」

そのような環境では仮に命までは取られなかったとしても、とてもじゃないが身も心も到底休まらないだろう。スティレットたちにとっての安住の地とは到底言い切れる物ではない。

だからこそシオンはスティレットたちと共に、コーネリア共和国に亡命しなければならないのだ。

絶対中立、差別根絶を掲げるコーネリア共和国でなければ、とてもスティレットたちを守る事が出来ないのだから。

『…シオンよ。お前は自分の立場を分かっているのか。お前は我が国の英雄なのだぞ。それに正式な任官手続きはまだだが、お前は大尉への昇格が決まっているのだ。それを…』

「身勝手な事を言っているのは重々承知しています。陛下やナナミたちを裏切る事になってしまう事も…でも僕が今守りたいのは国じゃない…スティレットたちなんです!!」

スティレットも、アーキテクトも、轟雷も、迅雷も…つい先日までシオンと死闘を繰り広げた敵同士だったというのに、今度はシオンが軍を辞めてまで彼女たちを守ると言い出したのだ。

シオンが通信を切っている間に、一体スティレットたちとの間に何があったのか…それはジークハルトやナナミたちには分からない。

ただ一つ言えるのは、アルフレッドが頭に血を上らせスティレットたちへの殺意を明確にしてしまったせいで、シオンの決意が揺るがぬ物になってしまったという事だ。

「シオン貴様あ！！国王陛下からの御進言にさえも歯向かうつもりなのかあっ！！」  
「言い訳は一切するつもりはありません。ステラたちを守る為に、僕は陛下を裏切ります。」  
「この裏切り者が！！最早容赦はせんぞおおおおおおおおおおおっ！！」

アルフレッドがシオンにビームマシンガンを放つものの、とっさにアーキテクトがシオンを庇うように前に出て、ビームシールドで弾幕を受け止めた。

最強の防御力を誇るアーキテクトのフレームアームの前では、ビームマシンガンなど所詮は豆鉄砲に過ぎない。アルフレッドはアーキテクトにかすり傷1つ負わせる事すら出来なかった。

そのアーキテクトの余裕の態度に、アルフレッドは悔しそうに歯軋りする。

「確かアルフレッドと言ったな？シオンにコーネリア共和国への亡命を提案したのはこの私だ。だから貴官が本来責めるべきはシオンではなく、この私だろう。」

「何だと！？貴様がシオンを誑かしたというのか！？」

「結果的にはそうなるな。だがそれでもシオンは英雄としての地位と名誉を捨ててまで、私たちを守ってくれたのだ。貴官もシオンの上官なら、そのシオンの決意と覚悟だけは、どうか理解してやってはくれないか？」

「貴様も貴様だが、貴様ら如きに誑かされるシオンもまた軟弱者だ！！」

「・・・最早何を言っても無駄のようだな。」

敵国の兵士が相手だからこそ、アルフレッドがアーキテクトの言葉に簡単に耳を貸せないのは仕方が無いのかもしれないが・・・まさかここまで器量の小さい男だとは。

互いに己と国の信念を懸けて命のやり取りをする以上、戦場では敵国の兵士に対して一定の敬意を示さなければならないというのに。

ただ激情に身を任せて目の前の敵を殺す・・・それではもう軍人とは呼べない。ただの殺戮者に過ぎなくなってしまうのだ。今アーキテクトの目の前にいるアルフレッドは、まさにそれなのだ。

アーキテクトは完全に頭に血が上ってしまっているアルフレッドに、心の底から失望していた。

「・・・何にしても僕たちは、今からコーネリア共和国に亡命します。ステラたちを守る為に。」

『シオン・・・！！』

「願わくば、脱出を許されん事を・・・！！」

武器を取り出し身構えるシオンたちだったが・・・スティレットだけはビームサーベルを懐から取り出そうとして、恐怖のあまり手が激しく震え出してしまった。

あの時、洗脳維持装置が暴走した状態においても尚、スティレットはしっかりと自己意識を保っていたのだ。

自分が殺した帝国軍の兵士たちの、恐怖に震えた表情・・・断末魔・・・そしてビームサーベルで生身の人間を斬った時の感触・・・それが今もスティレットの心と身体に染みついている。

元々軍人でありながら、敵国の兵士を殺す事が出来ないでいたスティレット・・・そんな心優しくて可憐な彼女だからこそ、自分が人を殺した時の感触をその手に刻んでしまった事で、武器を手にする事に恐怖心を抱くようになってしまったのだ。

「・・・ステラ。君はもう無理に戦わなくていいんだ。君は僕たちが守るから。」

「シオンさん・・・！！」

そんなスティレットの心情を瞬時に悟ったシオンは、右手のビームマシンガンの銃口をアルフレッドたちに向けながら、涙目になってしまったスティレットの肩を左手で優しく抱き寄せた。

5年前のあの時とは違う・・・今度こそ必ずスティレットを守り抜いて見せる・・・その決意をアルフレッドたちに見せつけながら。

「シオン！！これより貴様を国家反逆罪と抗命罪の現行犯で拘束する！！貴様ら総員突撃せよ！！奴らをこの場でひっ捕らえるのだ！！」

「あ、いや、でもギルマン大尉・・・シオン隊長は・・・。」

「何を躊躇っておるかナーブソン少尉！！かつての上官が相手だからといって容赦はするな！！奴の発言と行動は、我が国に対しての明らかな反逆なのだぞ！？」

シオンとの戦闘を拒絶するオスカルをアルフレッドは激しく叱責するが、それでもシオン隊の誰もがオスカルと同じ想いだった。

シオンがどんな気持ちで、どれ程の覚悟で、コーネリア共和国に亡命すると・・・スティレットたちを守ると言い出したのか。

そもそもジークハルトも言っていたが、もうオスカルたちがスティレットたちを傷つける理由など何も無いのだ。それを理解していない程オスカルたちは馬鹿ではなかった。

それなのにアルフレッドがスティレットたちを殺すなどと言うから、こんな事になってしまったのではないのか。

「・・・済まない、皆。そういう訳だから、僕たちはもう行くよ。」

「シオン隊長・・・何でこんな事になっちゃったんだよおっ！？」

「本当に何でこんな事になってしまったんだろうな。だけど僕は世界中を敵に回してでも、ステラたちを守りたいと思ったんだ。だから僕たちは今からコーネリア共和国に亡命する。」

シオンに促された迅雷が、懐から手の平サイズの球を取り出し、地面に叩き付けた瞬間・・・突然一筋の閃光と共に、周囲に大量の煙幕が撒き散らされた。

「おのれ、目くらましとは小賢しい真似を・・・！！キサラギ軍曹！！奴らの現在位置を私に伝える！！」

『…………』

「どうした！？何をやっているキサラギ軍曹！！奴らの現在位置を私に伝えろ！！」

『…………』

「ええい、どいつもこいつも腑抜け揃いがあつ！！」

『…………』

煙が晴れた頃には、シオンたちの姿は完全に見えなくなっていた。

まだそんなに遠くへは行っていないはず・・・こうなったら自分1人だけでもシオンを追いかけようとしたアルフレッドだったのだが。

『・・・もうよい。ギルマン大尉。』

そんなアルフレッドにジークハルトが追撃中止命令を下したのだった。

「陛下、しかし・・・！！」

『今コーネリア共和国に問い合わせたが、奴らが正式な亡命手続きをしたのは事実のようだ。それに今回の件に関しては、どう考えても私とお前に落ち度がある。』

「な、何故です！？奴はあのフレームアームズ・ガール共を守るなどという愚行を・・・！！」  
『そのフレームアームズ・ガールたちを抹殺しようとする行為自体が問題だというのが、お前にはまだ分らんのか？それにお前はシオンたちの話を聞いていなかったのか？』

アーキテクトたちがグランザム帝国に対しての謀反を宣言した。  
そしてヴィクターが死んだ事で、戦争は終結を迎えた。  
さらにスティレットに至っては除隊申請をしていたにも関わらず、ヴィクターに無理矢理洗脳されて戦わされていただけであって、それをシオンが救ったに過ぎないのだ。

だからこそルクセリオ公国騎士団が、今更スティレットたちを傷付ける理由など何も無いというのに、それをアルフレッドが血気盛んに殺すなどと言い出した・・・これではスティレットたちを守りたいと願うシオンの裏切りを招いて当たり前だ。

そしてそんなシオンが安心して戻れる環境を作ってやれなかった・・・アルフレッドや大臣たちのスティレットたちへの殺意を抑え切れなかったジークハルトにも、責任の一端はあると言えるのだ。

『・・・ステラたちを守る・・・か。あの時の鼻タレ坊主が、よくぞこれまでにになった物よ。』

「は？陛下、それは一体どういう・・・」

『何でもない。こちらの話だ。それよりもお前たちは新型兵器の鹵獲任務を継続せよ。諜報部からの情報通りなら、ゼピック村の近くに奴らの研究施設があるはずだ。』

「りよ、了解しました。」

アルフレッドたちが村の跡地の散策を再開した最中・・・ナナミは大粒の涙を流しながら、ビスマルクの指令室で泣いていたのだった。

何故こんな事になってしまったのか・・・つい先程までシオンは自分に対して、とても穏やかな笑顔を見せていたというのに。

それなのに突然、自分の前からいなくなってしまった・・・しかも戦死や行方不明などではなく、コーネリア共和国への亡命という裏切り行為によってだ。ナナミがショックを受けるのも仕方が無いと言えるだろう。

「・・・どうして・・・どうしてなんですか・・・シオン隊長・・・！！」

シオンの裏切りという現実を未だに受け入れられず、ナナミは悲しみの表情で身体を震わせていたのだった。

#### 4. コーネリア共和国へ

あれからアルフレッドたちがジークハルトの命令で追撃を中止したお陰で、シオンたちは何とか無事にコーネリア共和国領地内の指定のポイントで待機していた、コーネリア共和国の輸送艦フェニックスまで辿り着いたのだった。

出迎えた医療スタッフたちにシオンがスティレットの症状を説明し、グランザム帝国軍の医師から託された洗脳に関するデータも提供し、すぐに担架で医務室へと運んでもらう。

これからスティレットの脳に深刻なダメージが無いかを精密検査するとの事で、シオンたちは医療スタッフたちに応接室での待機を促されたのだった。

「よっ、久しぶりだねえ。まさかこんな形でアンタらと再会する事になるとは思わなかったよ。」

そんなシオンたちを出迎えたのは、以前遭難したシオンとスティレットを救助したアイラだった。とても穏やかな笑顔で、アイラはどっこいせと席に座る。

「大体の事情は把握しているよ。アンタらも大変だったね。何にしても無事に辿り着いてくれて何よりだ。」

「アーテル中尉・・・。」

「そんな堅苦しい呼び方はもう止めておくれよ、シオン。正式な亡命手続きを済ませたアンタらは、もう私たちの仲間なんだからさ。だから私の事はアイラと呼んでくれ。」

「・・・うん、分かったよ。アイラ。」

正式な亡命手続きを済ませた・・・もう私たちの仲間・・・アイラの言葉でシオンは、冗談抜きで本当にルクセリオ公国を裏切ってしまった事を実感したのだった。

だがそれでもシオンは、決して後悔などしていない。

あれだけアルフレッドがスティレットたちへの殺意を明確にしたのだ。それにスティレットたちの事を快く思わない者は、アルフレッド以外にもルクセリオ公国には大勢いるだろうから。

スティレットたちを守るには、もうコーネリア共和国への亡命以外に選択肢が無かったのだ。

世界中を敵に回してでもスティレットたちを守る・・・その決意と覚悟を持って、シオンはコーネリア共和国に亡命したのだから。

「それにしても、ついこの間までアンタらはシオンと殺し合ってたのに、今度はシオンと共にうちに亡命する事になるなんてねえ。世の中何が起こるか本当に分からないもんだ。」

「そうだな。だが我々には、そうしなければならぬ事情があったのだ。」

「かつての敵同士が、共に手を取り合う・・・か。確かに美談ではあるけど、それでもアンタらにとっては随分と重い決断だったんだろう。」

アイラはシオンの隣に座るアーキテクトを、とても興味深そうに見つめていた。

つい先日までこの2人は、互いに戦場で殺し合っていたというのに、それがいつの間にかこんな事になってしまったのだ。

だがどんな事情があるにせよ、こうして正式に亡命手続きをした以上は、もう彼女たちはコーネリア共和国の一員・・・アイラたちの仲間なのだ。

それからシオンたちは、あの遭難事件の後に何が起こったのか・・・そしてヴィクターがスティレットに何をしでかしたのか、5年前のゼピック村での事件の真相を、アイラに忌憚なく説明した。

本来ならシオンは、この一連の真実を世界中に伝える事で、ヴィクターを国際裁判にかけるつもりだったのだが・・・そのヴィクターはもう死んでしまった。

だがそれでもシオンは1人でも多くの人たちに、この真実を伝えなければならないのだ。

保身に走ったヴィクターの身勝手さのせいで、人生を狂わされたスティレットの悲劇を。

アイラもシオンたちの話に黙って耳を傾け、シオンたちに襲い掛かった悲壮な運命に同情し、そしてよくぞ生きてここまで辿り着いてくれたと感銘を受けていたのだが。

そこへ応接室に設置されていた通信機の着信音が、突然けたたましく鳴り響いた。

アイラはどっこいせと立ち上がり、受話器を手取る。

「・・・私だ。どうした？」

『リーズヴェルト少尉の精密検査と応急処置が無事に終了しました。検査結果と今後の治療方針について話がしたいので、至急アルザード中尉たちを医務室に連れて来て頂けませんか？』

「分かった。すぐにシオンたちを連れて行こう。」

アイラに案内されながら、シオンたちが医務室に向かうと・・・検査着に着替えてベッドで横になっているスティレットが、シオンたちにとっても穏やかな笑顔を見せていたのだった。

そのスティレットの無事な姿を見て、シオンたちは安堵の表情を見せる。

そして、そんなスティレットの右手を優しく両手で握っている、スーツ姿の1人の少女。

シオンたちの姿を確認した少女が立ち上がり、とても穏やかな笑顔でシオンたちに一礼する。

「皆さん、本当によく無事にここまで辿り着いてくれました・・・改めて自己紹介させていただきますね。エミリア様の専属秘書を務めさせて頂いております、マテリア・アーカイブと申します。」

「そうか。君が以前ステラが話していたマテリアか。」

「はい。ステラちゃんを助けて頂いた皆さんには、本当に心の底から感謝しているんですよ？」

見た所、スティレットと同じ年頃の女の子のようだが・・・そう言えばスティレットが随分と彼女の事を心配していたのを、シオンは今になって思い出していたのだが。

だがマテリアはシオンたちが全く予想もしなかった、とんでもない事を白状したのだった。

「君の事はステラが随分と心配していたんだけど・・・君はステラとどういう関係なんだい？」

「・・・実は私、バンパイアなんです。」

「バッ・・・バンパイアあつ！？」

いきなりのマテリアの言葉に、驚きを隠せないシオンたち。

マテリアは少し口を開けて、人間の物よりも鋭利に発達した犬歯をシオンたちに見せつける。

それはマテリアが人外の存在であるという事の、逃れようのない確固たる証だ。

「バンパイアって、あの女性しかいないっていう吸血一族の事だよね！？僕も中学校の授業で話だけは聞いた事があるけど・・・」

「はい、私の母もバンパイアだったのですが・・・それでも私は両親と一緒に正体を隠しながら、3人で穏やかにマルス村で暮らしていたんです。」

バンパイアは化け物だ、忌むべき存在だと、シオンは中学校の授業で教え込まれてきたのだが・・・それでも目の前にいるマテリアは、とても化け物などとは呼べない可憐な少女だ。

マテリアは穏やかな笑顔を崩さず、シオンたちの事を見つめ続けている。

「ですが半年程前に私と母の正体が村の皆にバレてしまって、両親を殺されてしまって・・・私も殺される寸前だったのですが、そこへステラちゃんに命を救われたんです。そしてステラちゃんに勧められて、私はコーネリア共和国に亡命したんです。」

「・・・そうか。差別根絶を掲げているコーネリア共和国なら、バンパイアの君も迫害されずに安心して暮らしていけるはずだと・・・そうステラが判断したんだな？」

「はい。そして私はエミリア様に拾われ、専属秘書として仕えさせて頂いているんです。」

いきなりバンパイアだとか言われて驚きを隠せずにいたシオンたちだったが、それでもシオンたちは中学校の授業で習ったような、マテリアが忌むべき化け物だとは微塵も思わなかった。

目の前にいる彼女は、どこからどう見ても人を襲うようには見えない可憐な少女だ。

それ以前に仮にマテリアが化け物として人々を襲うようなら、いくらコーネリア共和国が差別根絶を掲げていると言っても、軍がマテリアの事を決して放置してはおかないはずだろう。

そのマテリアが、こうして無事に笑顔でここにいる・・・つまりはそういう事なのだ。

「エミリア様もステラちゃんも私の正体を知りながら、それでも私の事を受け入れてくれた・・・だから私は2人にはとても感謝しているんです。そしてステラちゃんを救って下さった皆さんにも・・・」

「あー、マテリア君。話し込んでいる所へ申し訳無いが・・・アルザード中尉たちにリーズヴェルト少尉の検査結果について説明したいんだけど、いいかな？」

「・・・ああ、ごめんなさい！！私ったら、つい・・・！！」

医師に促されたマテリアが、慌ててシオンたちから離れる。

そしてスティレットに治療を施した医師が、脳内を映したレントゲンの写真を見せながら、シオンたちにスティレットの検査結果と、今後の治療方針について説明したのだった。

医師の話によると、シオンが提供してくれた洗脳データのお陰で、スティレットの検査と応急処置を迅速かつ的確に行えたとの事だ。

まず心配されたスティレットの脳へのダメージや後遺症についてだが、脳細胞の一部が傷ついてはいるものの、シオンが洗脳維持装置を迅速に壊してくれたお陰で深刻なダメージには至っておらず、若くて健康なスティレットなら放っておいても数日あれば完治するだろう、との事らしい。

ただし肉体的な傷は外的治療で治せても、心に受けた傷は簡単には治らない・・・いや、一生心に深く刻まれる事もある。

スティレットは洗脳措置によって残酷な映像を長時間見せられ続けた事や、それに伴う肉体的、精神的な拷問に晒された影響、そして両親や親友の死の真相を思い出してしまった事で、重度のPTSD(心的外傷後ストレス障害)の発症の危険があるとの事らしい。

それで予防措置として、取り敢えず精神安定剤を飲ませた上で、スティレットの心を安心させる為に知り合いのマテリアに傍にいて貰ったのだそうだ。

今後の治療方針としては、今後1週間は1日4回、食後と就寝前に精神安定剤を服用させる事になったのだが、精神安定剤というのは長期間常用的に服用を続けると、逆に依存症を引き起こしてしまう恐れがあるとの事らしい。

なので様子を見ながら、精神安定剤の投与数を徐々に減らしていこうという話になった。

そして何よりも大切なのは、スティレットの心に強い負担を掛けない事・・・そしてスティレットが心の拠り所になっているシオンたち、特に恋人であるシオンが常に傍にいてやる事・・・それがスティレットにとっての最大の特効薬になるとの事だ。

「もう、ステラったら本当に世話が焼けるんだから～。シオンが助けてくれたお陰で、何とか無事で済んだから良かったけど・・・。」

「うん・・・心配かけちゃってごめんね。轟雷ちゃん。」

「まあステラが無事ならそれでいいんだけどさ・・・私たち亡命したのはいいんだけど、これから一体どうすればいいのかな？」

轟雷の言葉で、シオンたちは不意に顔を見合わせた。

確かにシオンたちはコーネリア共和国に亡命するので頭が一杯で、今後の身の振り方については全く考えていなかった。

シオンたちの実力なら、コーネリア共和国軍にスカウトされる事もあるだろうが・・・そうすると下手をするとシオンたちは、かつて所属していた部隊を本当の意味で敵に回す事にもなりかねない。

ヴィクターが死んだ事で、この10年も続いた戦争も、ひとまずは終結を迎えるだろうが・・・もしルクセリオ公国騎士団やグランザム帝国軍がコーネリア共和国に攻めて来るような事態になった場

合、シオンたちはかつての仲間と戦わなければならなくなるのだ。

そういう意味合いからシオンたちは、民間企業に再就職するのが一番なのだろうが。

「…取り敢えず今後の事については、ステラの容体が安定してから…」

「あの、その事についてなのですが…エミリア様から皆さんへの伝言を承っています。」

言いかけたシオンの言葉を、マテリアが遮った。

「実はエミリア様が皆さんとの面会を希望していらっしゃるのですが、今日はもうこんな時間ですので、城内に皆さんの部屋を用意させたので、今日はそこで寝泊まりして欲しいとの事です。」

「…エミリア様が僕たちとの面会を…しかも城内に僕たちの部屋を…!？」

一介の亡命者でしかない自分たちとの面会を、王族であるエミリアが自ら望むだけでなく、まさか城内に部屋まで用意させるとは。

幾ら何でも待遇が厚過ぎるのではないか…シオンは驚きを隠せなかった。

てっきり亡命者が一時的に滞在する為の、保護施設か何かで寝泊まりする事になるのではと、そうシオンは思っていたのだが。

まあそれでもエミリアとの面会自体は、シオンも自ら望んでいた事でもある。

戦争の悲惨さ、大切な者を理不尽に失ったシオンたちの悲しみや絶望…何よりもヴィクターの身勝手さのせいで人生を狂わされたスティレットの一件について、シオンはエミリアと話がしたいと思っていたのだから。

「それでエミリア様のスケジュールの都合がありますので、面会は明日の12時から昼の1時まで、昼食を食べながらでお願いしたいとの事です。皆さんそれでよろしいでしょうか？」

「構わないよ。僕たちに拒否する理由は何も無いからね。」

「承りました。ではエミリア様にも、そのように伝えておきますね。」

穏やかな笑顔でシオンにそう告げたマテリアだったが、不意に窓の景色を見つめたスティレットが、思わず感銘の溜め息を漏らしたのだった。

窓から見えてきたのは、もうすぐ日が沈んで夜になろうかという、薄暗い夕焼けの光に照らし出された、大自然に囲まれた城下町の光景。

多くの建物から漏れる光が、周囲の大自然と夕焼けの光と合わさって、何とも幻想的な景色を作り出している。

ルクセリオ公国やグランザム帝国のような大都会とは違う…このコーネリア共和国は、緑と自然に囲まれた美しい国なのだ。

スティレットに釣られて窓の景色を見つめたシオンたちもまた、その美しくも幻想的な光景に心を奪われていたのだが。

「…ステラちゃん…そしてシオンさん、アキトさん、轟雷ちゃん、迅雷ちゃん。」

とても慈愛に満ちた笑顔で、マテリアはシオンたちに敬礼したのだった。

「緑溢れる自由と平和の象徴…コーネリア共和国へようこそ。」



## 5. 王妃エミリア

それから城まで連れていかれたシオンたちは、当面の滞在先となる城内の部屋に案内され、そこで戦闘で疲れ切った心と身体を存分に癒したのだった。

部屋割りはシオンとステイレット、轟雷と迅雷、そしてアーキテクトが1人部屋・・・という割り振りになったのだが、結局は轟雷と迅雷がシオンとステイレットの部屋に突撃してきたので、シオンとステイレットはあまり2人きりになれなかったりする。

それでもシオンがかつて敵同士だった轟雷や迅雷と笑い合う光景に、ステイレットは心の底から安堵を覚えたのだった。

轟雷と迅雷が部屋に戻った後・・・美しい星々と月の光に包まれながら、シオンとステイレットはダブルベッドの中で布団に包まれ、互いの手を握り合いながら、お互いに離れ離れになってからの5年もの間に何があったのか、どんな人生を歩んできたのかを静かに語り合った。

シオンはこの5年間で上等兵から中尉にまで昇進したものの、戦争で妻と娘を失った事を。

ステイレットは士官学校で轟雷や迅雷と出会い、すぐに仲良くなった事・・・そして3人で一緒に配属された部隊で上官となったアーキテクトが、愛情を持って自分たちを支えてくれた事を。

互いにこうして生き延び、5年ぶりの再会を果たした事を喜び合い・・・シオンとステイレットは互いの存在と温もりを感じ合いながら、静かに眠りについたのだった。

そして翌日の昼・・・遂にシオンたちがエミリアと面会をする時がやってきた。

メイドの女性に連れられて、シオンたちは城の応接室へと案内される。

扉の前でエミリアの警護を担当するコーネリア共和国軍の兵士2人が、穏やかな笑顔でシオンたちに敬礼をしたのだった。

「さあ皆さん、どうぞこちらへ。エミリア様がお待ちになっておられます。」

メイドの女性がシオンたちに深々と頭を下げ、兵士2人が扉を開ける。

次の瞬間、シオンたちを包み込んだのは、とても美味しそうな料理の香り。

そして扉の向こうにいたのは、とても穏やかな笑顔をシオンたちに浮かべる1人の中年の女性、そして彼女に寄り添うマテリアの姿。

メイドの女性に促されたシオンたちが部屋に入ると、背後の扉がそっ・・・と静かに閉じられた。

「よく来てくれましたね皆さん。コーネリア共和国王妃を務めさせています、エミリア・コーネリアと申します。貴方たちの事はマテリアからよく聞かされていたのよ？」

「エミリア様。僕たちの亡命を受け入れて下さって、本当にありがとうございました。」

「さあ5人共、遠慮しないで座って頂戴。折角の料理が冷めてしまうわ。」

「はい、それでは失礼します。」

シオンたちが席に座ると、それを合図にマテリアも、エミリアとアーキテクトの隣の席に座る。

円卓のテーブルの上に並べられたのは、マテリアや城の料理人たちがシオンたちの為に、心を込めて作ってくれた料理。

サラダスパゲティ、鶏肉のステーキ、コーンスープ、クリームチーズのリゾット・・・そしてデザートフルーツポンチ。

どれも実に見事な出来栄で、栄養のバランスもきちんと考えられている。

シオンがナイフで切った鶏肉のステーキを、口の中に一口入れた途端・・・柔らかい肉がジューシーな肉汁を放ちながら、シオンの口の中で溶けていくかのようにだった。

「・・・うん、美味しい。」  
「えへへ、それ私が作ったステーキなんですよ？」  
「へえ、そうなのか。大した物じゃないか。」

とても美味しそうに料理を口にするシオンの姿に、マテリアはとても嬉しそうな表情を見せる。

「・・・あ、この冷麺も凄く美味しそう。」  
「迅雷ちゃん、それは冷麺じゃなくてパスタ・・・」  
「ずるずるずるずるずる。」  
「・・・って、迅雷ちゃん、パスタは音を立てて食べちゃ駄目だってばあつ。」  
「ふがふごごふがふご。」  
「ほら、ドレッシングが口に付いてるよ？もう、本当にお行儀が悪いんだから〜。」

ナプキンで迅雷の口元を拭うスティレットの姿に、アーキテクトはクリームチーズのリゾットを口にしながら苦笑いを浮かべる。

正直スティレットに洗脳による後遺症が無いかを心配していたのだが、医師が言っていた通り、見た限りでは大丈夫そうだった。

とはいえ、心に受けた傷は簡単には治らない・・・いや、スティレットの心に一生深く刻まれる恐れもある。今は大丈夫だからといって油断するわけにはいかなかった。

これからは自分たちが、心に傷を負ったスティレットを支えてやらなければ・・・アーキテクトは改めてその決意を顕わにしたのだった。

かつては何度も死闘を繰り広げながらも、今は頼れる同志となったシオンと共に。

「・・・ところでシオン。お前は何故オクラを残すのだ？」  
「あ、いや、僕はこういうネバネバした食べ物は苦手でさ。」  
「何？ならお前は納豆や里芋も食べられないと言うのか？」  
「う、うん、まあね。」  
「・・・この軟弱者が。まあいい、お前が要らないなら私が貰うぞ。」  
「うん、まあいいけど。はい。」

苦笑いしながらアーキテクトは、シオンが差し出した皿のオクラをフォークでぶっ刺して、口の中に入れてののだが。

スティレットが目をうるうるさせながら、オクラを美味しそうに食べるアーキテクトを見つめていたのだった。

「・・・あの、アキトさん。」  
「ん？どうしたステラ？」  
「・・・それ、シオンさんとの間接キスですよ？」  
「・・・あ。」  
「アキトさんの馬鹿あああああああああああああああつ(泣)！！」  
「まあ細かい事は気にするなステラ。ははははははは。」

楽しそうなシオンたちの姿を見ながら、エミリアはとても嬉しそうな表情を見せたのだった。

かつてシオンはアーキテクトたちと、敵同士として殺し合いをしていた・・・それでも今は色々あつ

て、こうして手を取り合い笑顔を見せ合う関係になったのだ。

そんなシオンたちだからこそ、この戦乱の世の中を平和へと導く存在になれる・・・エミリアはそれを確信していた。

「円卓はいいですよ。こうして互いに対等の立場で話が出来ますから。」

食後の紅茶を飲みながら、エミリアはシオンたちに突然そう切り出したのだった。

それを合図に、それまで楽しそうに騒いでいたシオンたちが、一斉に姿勢を正してエミリアに傾注する。

シオンたちがここまでやってきたのは、楽しく昼食を食べる為だけではない・・・エミリアと面会をする為でもあるのだ。

「さて、食事も済んだ事ですし、そろそろ本題に入りましょうか・・・私たちコーネリア共和国は、貴方たち5人の亡命を歓迎致します。」

「僕たちもエミリア様に、そして僕たちを温かく迎えてくれたこの国の人たちに、心の底から感謝しています。特に洗脳されたステラを診て下さった事には、何とお礼を言えればいいのか・・・。」

「大体の事情は把握しています。本当に大変でしたね。そしてよくぞ無事に5人揃ってここまで辿り着いてくれました。」

自分に注目するシオンたち5人の、1人1人の顔をじっ・・・と見つめるエミリア。

本当によくぞ無事にここまで辿り着いてくれた・・・しかもシオンは国を裏切ってまで、英雄としての地位や名誉をかなぐり捨ててまで。

元々グランザム帝国軍に村を滅ぼされたスティレットや、そのスティレットと共に歩んできたアーキテクトたちにとっては、グランザム帝国を裏切る事に何の躊躇も無かっただろうが・・・シオンにとってはかなり重い決断だったに違いない。

それでも尚シオンは・・・スティレットたちを守る為に、命懸けでこの国まで来てくれたのだ。

「ですが貴方たちも知っているとは思いますが、私たちコーネリア共和国は絶対中立、差別根絶を国の掟として掲げています。この国に亡命した以上は、貴方たちにもその掟に従って貰う事になります・・・。」

「はい。だからこそ僕は、この国でなければステラたちを守れないと判断したのですから。以前ステラがマテリアを、この国に連れて行った時と同じように。」

「マテリアもバンパイアだからという理由だけで迫害され、両親を失い、この子自身も殺される寸前だったのをステラが救ってくれたと聞いています・・・何も悪い事をしていないこの子が迫害されるなど、そんな事は絶対に許されるべきではありません。」

「差別根絶を掲げる自由と平和の象徴の国・・・だからこそマテリアはこの国で安心して暮らしてられる・・・彼女が作った料理からは、そんな安心感のような物が感じられました。」

料理というのは、人の心を映し出す物だ。

仮にマテリアがエミリアに奴隷として扱われていたとしたら、あそこまで慈愛に満ちた料理は作れなかったはずだ。それは普段から自炊しているシオンだからこそ理解出来た事だ。

この国で迫害される事無く穏やかに暮らしているからこそ、マテリアの料理からは彼女の優しさと温もりが感じられたのだ。

だがそれでもシオンには、懸念していた事があった。

「ですがエミリア様。敢えて無礼を承知で言わせて頂きますが・・・だからこそこの国は、他の国々から圧力をかけられているのではないのでしょうか？」

「ええ、シオンの言う通りです。マテリアを保護した時にも、幾つかの国から強い批判を浴びせられました。バンパイアを保護するとは何事だ、すぐに処刑するべきだとね。」

「それでもエミリア様は、マテリアを保護する道を選ばれたのですね？例え世界中の国々を敵に回したとしても。」

「私たちは他国からの不当な圧力に屈するつもりは微塵もありません。私はこの国を不当な差別など無い、誰もが穏やかに暮らしていける国にしていきたいと思っています。だからこそ私は絶対中立、差別根絶を国の掟として掲げているのです。」

絶対中立、差別根絶・・・口で言うのは簡単だが、それでも相当な困難が伴う道だろう。

絶対中立という事は、他の全ての国を敵に回す事を意味する・・・だがそうでもしなければ差別根絶など、到底叶う事のない理想なのだ。それはマテリアを保護した際に他の国々から圧力を掛けられた事を考えれば、容易に理解出来る事だろう。

それでもエミリアは屈するつもりは無かった。不当な差別など無い、誰もが穏やかに暮らしていける・・・そんな理想の国を作る為に。

だがどれだけ理想を掲げようが、何の力も持たない想いなど何の意味も無い。すぐに他国からの圧力に潰されてしまうだけだ。

その為の自衛手段として、コーネリア共和国軍が存在しているのだろうが。

「ここからが本題になりますが・・・私は貴方たち5人に、この国の象徴になって貰いたいと思っています。争いに満ちたこの世界を真の平和へと導く為に。」

「・・・この国の象徴・・・ですか・・・？僕たちに軍に入隊しろとかではなく？」

予想外の言葉にシオンたちは、驚きと戸惑いを隠せずいた。

てっきり亡命の対価としてコーネリア共和国軍に加わって欲しいと・・・その力を国を守る為に役立てて欲しいと、そんなような事を言われると思っていたのだが。

だがエミリアは穏やかな笑顔で、首を横に振った。

「貴方たちが軍に加わってくれば、確かにこれ以上無い心強い戦力ではありますね。ですが私は貴方たちには戦場ではない、別のステージで働いて貰いたいのです・・・この国の掟である差別根絶の象徴として。」

「ですが象徴になれば急に言われても、一体僕たちに何が出来るのか・・・。」

「貴方たちが戸惑うのも無理も無いかもしれませんが、ですが敵同士でありながらこうして手を取り合い、この国に亡命してきた貴方たちだからこそ、出来る事があるのです。」

一体全体何が何だか、全然意味が分からないといったシオンたち。

まあ無理も無いだろう。いきなりこの国の象徴になればと言われて、戸惑いを隠せない訳が無い。テレビやラジオにでも出て、演説か何かしろとでも言うのだろうか。

「・・・何にしても、今の貴方たちに必要なのは心と身体の休息です。特にステラは心に大きな傷を負ってしまったのですから。幾ら医師に脳の異常は無いと診断されたからと言っても無理は禁物です。ステラが心の傷を癒す時間は必要でしょう・・・いいですね？ステラ。」

「・・・エミリア様・・・私は・・・。」

「この国の象徴として、貴方たちにやって貰いたい仕事は山ほどあります・・・ですが今は激しい戦いで疲れ切った心と身体を癒す事を考えて下さい。それまでの間、貴方たち5人は私の客人として扱います。」

すっかり話し込んでいる内に、時計の針が1時を回ろうとしていた。  
腕時計を見たマテリアが、タブレットを見ながらエミリアにスケジュールを告げる。

「エミリア様、そろそろ魔法化学研究所の視察のお時間です。」  
「あらやだ、もうこんな時間。貴方たちとゆっくり話す時間も無いわね・・・そうだ。貴方たち、今日の夕方5時から収穫祭が始まるから、折角だから見に行ったらどうかしら？」

エミリアの言葉に、シオンは驚きを隠せなかった。

「お祭りって・・・この戦時中の世の中にですか!？」  
「こんな世の中だからこそ、生きる喜びを忘れてはいけないのですよ。今日は豊穰の女神ラーミア様に今年の豊作の感謝を伝える為の、年に一度の収穫祭の日です。屋台も沢山あるし、色んな催し物も見られますよ？」

思わず顔を見合わせたシオンたちだったが、まあ確かに城の中でじっとしていても退屈になるだけだ。折角なのでシオンたちは、5人で収穫祭を見に行ってみる事にした。

「じゃあ決まりだな。皆、待ち合わせは城門前でいいかな？」

楽しそうに話すシオンたちを、エミリアとマテリアが穏やかな笑顔で見つめていたのだった。

## 6. シオンとステラ

コーネリア共和国の城下町は、年に一度の豊穰祭が開催されるという事もあり、城下町全体の雰囲気賑やかな活気に満ち溢れていた。

豊穰祭・・・コーネリア共和国が信仰している豊穰の女神ラーミアに、今年の豊作の感謝と来年の豊作の祈願を伝える為の催しである。

多くの道路で車両が通行禁止の歩行者天国となっており、あちこちで色々な屋台が設置されており、派手なイルミネーションが街中を彩っており、多くの人々がとても楽しそうな笑顔で道路を行き交っている。

そんな祭りの雰囲気をぶち壊すかのように、人々から財布を盗もうとしたり恐喝する者たちが何人もいたのだが、その全てが祭りの警備に当たっていたコーネリア共和国軍によって拘束されて、未遂に終わっていた。

ルクセリオ公国では戦時中という事もあり、もう10年近くもの間こういった祭り事は、別にジークハルトが禁止していた訳ではないのだが、自治会が今の戦時中の世の中に配慮して自粛してしまっていたので、シオンは中学時代以来となる久しぶりの祭りの光景に、感慨深い物を感じていた。

夕方5時・・・待ち合わせ場所に指定した城の正門前で、スティレットたちを待っていたシオンだったのだが。

「シオンさ～ん、お待たせ～」

浴衣姿のスティレットが笑顔で手を振りながら、シオンの下に駆け寄ってきたのだった。

とても嬉しそうな笑顔で、スティレットはシオンの左腕を両腕で抱き締める。

そんなスティレットの姿に苦笑いを浮かべるアーキテクト、そして轟雷と迅雷の姿も。

普段から彼女たちのフレームアームを身に纏った姿ばかり見てきた事もあり、4人の可憐な浴衣

姿にシオンは素直に感嘆したのだった。

「えへへ、この浴衣、アキトさんが着付けてくれたんですよ？ どうですか？ 似合ってます？」  
「うん、とても似合ってるよステラ。それにアキトたちも。」

自分の左腕にしがみついたスティレットを、穏やかな笑顔で見つめるシオン。

「隊長ってばこう見えて、意外と家庭的な一面もあるんだよね〜。料理も裁縫も得意だし。」  
「意外とは余計だぞ、轟雷…では、行くでしょうか。」

アーキテクトの言葉に笑顔で頷いたシオンたちは、とても和やかな雰囲気、豊穰祭が始まったばかりの城下町へと歩き出す。

街のあちこちにある様々な屋台から活気溢れる客引きの声が響き、その呼びかけに釣られて屋台に訪れた沢山の人々が、食事やゲームなどを楽しんでいる。

そんな人々に紛れて祭りを楽しむシオンたちだったが、シオンたちの存在に気付いた周囲の人々が一斉に騒ぎ出し、シオンたちの所に集まり出す騒ぎになってしまった。

シオンたちはコーネリア共和国でも以前からかなりの有名人だったようで、またシオンたちの亡命の件についても朝から新聞やニュースで大々的に報じられる程の騒ぎになっており、それ故に多くの人々がシオンたちに注目して、デジカメやスマートフォンで写真を撮っていた。

中には頼んでもいないのに、シオンたちに売り物の食べ物を無償で提供したり、ゲームを無償で遊ばせる屋台の主までも、何人か現れ出してしまふ始末だ。

お陰であつという間にシオンたちの両手が、一銭たりとも金を使っていないのに、食べ物やゲームの景品などが沢山入った袋で塞がってしまう事態になってしまった。

シオンは苦笑いしながら焼きたてのタイ焼きを口に、自分の左手を右手で恋人繋ぎするスティレットを見つめる。

スティレットもまたリンゴ飴を美味しそうに舐めながら、とても幸せそうな笑顔でシオンに見せたのだった。

そして近くにいたコーネリア共和国軍の兵士に勧められて、シオンたちが神社に向かうと…そこでは豊穰の女神ラーミアに扮した踊り子姿の少女が、とても爽やかな笑顔で人々に華麗な踊りを披露していた。

兵士が言うには、何でも豊穰祭の女神役を決める為のオーディションが毎年開催されており、女神役1人の枠を毎年200人近くが派手に争っているのだそうで、今年は厳正な審査の結果、コーネリア共和国軍の少女が選ばれたとの事だ。

女神役の少女の華麗な踊りに、人々の誰もが感嘆の声を上げる。

そして曲のクライマックスに合わせて側転、バク転、さらに空中でバク宙し、華麗に着地。

両手を広げて綺麗に着地する少女の姿に、人々は大絶賛の歓声と拍手を送ったのだった。

踊りを終えて充実した笑顔を見せる少女に神社の神主の老人が歩み寄り、来年の豊作を女神ラーミアへと祈願する儀式を、穏やかな笑顔で執り行う。

神主が盛大な祝詞を唱えながら、少女の目の前で大幣(おおぬさ)を何度も振り払う。

とても恥ずかしそうな笑顔で、神主の儀式を受ける少女。

盛大な盛り上がりを見せていた豊穰祭も、いよいよクライマックスの時が迫っていた。

だが儀式を終えた少女が笑顔で退場し、多くの人々が神社を後にした、その時だ。

「…おいてめえ、俺らの目の前で女4人連れとか、舐めた真似してんじゃねえぞコラ。」  
「見せつけやがってよ。何様のつもりだてめえ？ああ？」

ガラの悪そうな男4人が、物凄い形相で突然シオンに絡んできたのだった。  
いきなりの出来事に、まだ神社に残っていた周囲の人々が怯えながら悲鳴を上げる。  
そんな周囲の人々とは対照的に、絡まれた張本人であるシオンは毅然とした態度で、ステイレットたちを守るかのように男たちを見据えた。

「…なあお前ら…よく見たらこいつ、あのシオン・アルザードじゃねえのか？」  
「うほっ、マジかよ！？あの伝説の英雄様かよ！？こんなへタレそうな奴がか！？」  
「こんな優男が英雄とか、ルクセリオ公国も地に落ちたもんだなおい！！」

男たちはシオンの事はニュースで知ってはいたが、それでも実際にシオンと対面してみて、とても軍人とは思えないシオンの見た目に、思わず笑いが止まらなくなってしまった。  
ルクセリオの英雄とか呼ばれているから、男たちはシオンの事を屈強そうな男だとばかり思っていたのだが…これでは自分たちの方が余程筋肉質で強そうではないか。  
シオンの事を馬鹿にする男たちだったが…彼らは知らないのだ。シオンが過酷な戦場でどれだけの死線を潜り抜けてきたのかを。どれだけの実戦経験を積んできたのかを。  
彼らはまさに、見た目だけで人を判断して痛い目に遭うと言う、とても良い手本だ。

「英雄つつてもよ、所詮はあのパワードスーツ…だったか？あの鎧みてえな武装があつてこそだろ？今の丸腰のこいつに何が出来るのかつてんだ。なあ？」  
「俺らはこの辺り一帯をシメてる、チーム・グランルージュのモンなんだけどよ…お前マジでむかつくからよ。今から死刑な。」

男の1人が突然構え出し、いきなりシャドーボクシングを始めた。  
その僅か数秒の男の身のこなしだけで、シオンは瞬時に判断する。  
成る程、筋肉の質もいいし動きも悪くない。相当に喧嘩慣れしているのは確かなようだ。  
それに…どうやら彼らは人を傷つけたり殺すのに、何の躊躇いも持っていないようだ。

「見ろ！！このスピード！！俺様のこの音速の拳が、てめえに見切れるか！？」

シュツ！！シュツ！！

男はシオンをびびらせる為に、何度もシオンの目の前で拳を突き出してきたのだが。  
全く動じないシオンに逆上した男が、とうとうシオンに本気で殴りかかってきた。  
だがシオンは涼しい表情で男のジャブを受け流し、体勢を崩した男の両足を軽く蹴飛ばして転倒させ、さらに背後から男の右腕を極めて拘束したのだった。  
その華麗な動きに、周囲の人々の誰もが感嘆の声を上げる。

「ながあっ！？」  
「音速の拳か…僕の目には止まって見えるけどな。」  
「て、てめえ、ふざけやがって！！この女がどうなってもいいのかコラあっ！？」

男の1人がステイレットを羽交い絞めにしたのを見て、シオンは厳しい表情を見せる。  
別にこんな連中にステイレットが傷つけられるとは思っていないのだが、シオンはステイレットの心に負担が掛かってしまうのを気にしているのだ。  
医師から処方された精神安定剤を服用しているとはいえ、洗脳によって心に甚大な傷を負って

しまったスティレットは、見た目は大丈夫そうでも精神的にとっても不安定な状態にある。  
だからこそスティレットの心に負担を掛けるような事態は、なるべく避けたいといけなのだが。

「…シオンさんを虐めるな…！！」  
「な…どあああああああああつ！？」

スティレットは自分を羽交い絞めにした男を背負い投げで地面に叩き付け、物凄い形相で睨み付けたのだった。

その年頃の少女には分不相応の、凄まじいまでの威圧感と殺気を敏感に察知し、スティレットに投げ飛ばされた男は怯えた表情で、思わず小便を漏らしてしまう。

「シオンさんを虐めるなああああああああああつ！！」  
「ひ、ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいっ！？」

そのままスティレットは男の胸倉を掴み、拳で顔を殴りつけようとしたのだが。

「ステラ…！！」  
「お〜っと、駄目だよステラちゃん。それ以上は正当防衛の範疇を超えちゃうから。」

止めようとしたシオンの背後から、私服に着替えた先程の女神役の少女が声をかけてきた。  
少女は屈強そうな男たちを前にしても全く怯む様子を見せず、とても穏やかな笑顔をシオンたちに見せている。

スティレットは男の胸倉を掴みながら、呆気にとられた表情で少女を見つめていたのだが。  
その少女の余裕の態度が気に入らないと思ったのか、残りの男2人が一斉に少女に絡んできたのだった。

「何だてめえ、女神役に選ばれたからっていい気になってんじゃねえぞコラあ！！」  
「アンタたちもさあ、折角の楽しい祭りをぶち壊しにするような真似は止めようよ。皆が迷惑してるって分からないのかな？」  
「ふざけんじゃねえぞ、てめ…っ！？」

だが男が少女の胸倉を掴もうとした瞬間、少女は突き出してきた男の右手首を左手で素早く掴み…次の瞬間、男の身体が空中で一回転したのだった。

受け身も取れずに地面に叩き付けられた男が、とても苦しそうな呻き声を上げる。  
一体何が起こったのか。というか一体何をされたのか。  
訳が分からないといった表情で、男は全身に襲い掛かる激痛に苦しんでいる。

「こ、この…！！」

最後に残った男が懐からナイフを取り出したのだが、少女が掌底を男の腹に繰り出した瞬間、男は派手に吹っ飛ばされて神社の壁に叩き付けられたのだった。

その少女のあまりの強さに、周囲の人々の誰もが驚きの声を上げる。

「これは…合気道か！！」  
「さすがシオンさん。見ただけで分かっちゃうなんて凄いね〜。」

驚きの表情を見せるシオンに対して、少女は勝ち誇った笑顔で親指を立てたのだった。



彼女はコーネリア共和国軍所属の軍人との事だが、これ程の使い手はルクセリオ公国騎士団にも数える程しかいないだろう。

そして騒ぎを聞きつけて駆けつけてきたコーネリア共和国軍の兵士たちが、シオンたちに叩きのめされた男4人を傷害未遂の現行犯で逮捕する。

ご協力、感謝します…シオンたちに敬礼をし、兵士たちは男たちを連行していったのだが。

「そう言えば自己紹介がまだだったね。私はコーネリア共和国軍のフレームアームズ・ガール部隊(予定)所属、アリュージャ・ルーカス少尉でありますっ。」

とても爽やかな笑顔でシオンたちに敬礼をするアリュージャの、全く予想もしなかった言葉に、シオンたちは驚きを隠せなかった。

「フレームアームズ・ガールだって！？コーネリア共和国軍にも存在していたのか！？」

「まだ(予定)なんだけどね。ステラちゃんが提供してくれたフレームアームをベースにして、魔法化学研究所で発展量産型を開発してる最中なんだ。」

「そうだったのか…しかし驚いたな。」

「フレームアーム自体は、シオンさんとステラちゃんたちの戦闘データを元にして、私たちでも以前から独自に開発してたんだけどさ。ステラちゃんが実物を提供してくれたお陰で開発が一気に進みそうだって、私のお爺ちゃんが凄く喜んでたよ。」

このコーネリア共和国は絶対中立…それはつまり他の国々全てを敵に回す事を意味する。

そしてエミリアが掲げる差別根絶の理想に反発し、圧力を掛ける国も決して少なくない。

だからこそ、その脅威から国を守る為の絶対的な力が必要なのだろう。

想いの無い力など、ただの暴力に過ぎない…だが何の力も無い想いなど、何の意味も無いのだから。

「シオンさんたちの事は、私もマテリアちゃんから聞かされたよ。ステラちゃんを洗脳とか、本当に帝国も酷い事をするよね…っと、お爺ちゃんからだ。」

アリュージャの腕時計型の通信機から、とても屈強な肉体の老人のホログラムが映し出されたのだった。

昨日から城や街の設備を目にしてきたシオンたちも気になっていたのだが、このアリュージャの通信機にしても、コーネリア共和国の科学技術は他の国々よりも随分と先を進んでいるようだ。

この国が他国から強い圧力を掛けられているのは、絶対中立や差別根絶への反発による物だけではない。

これらの優れた科学技術を手に入れようと、躍起になっている国々も存在しているからなのだ。

魔法化学…『精霊魔法』と『マナエネルギー』を融合させた、コーネリア共和国が独自に進化させた科学技術…それはシオンたちも名前だけは聞いた事があったのだが。

『こら～！！アリュージャ～！！女神役が終わったらさっさと戻って来いって、お前に伝えてあっただろうが！！何をいつまでもそんな所で油を売っておるか！？』

「え～、だってシオンさんたちが不良たちに絡まれてたから、助けてあげたんだけど！？」

『いいからさっさと戻って来い！！今日は祭りが終わったら、家族でファミレスまで飯食いに行くって話になってただろうが！！アスベルとナターシャもお前の帰りを待ってんだぞ！？』

「それはそうなんだけど、だからシオンさんたちを助けてたんだってばあ！！今からすぐに家に帰るからってパパとママに伝えといて！！それじゃ！！」

通信を切ったアリューシャは溜め息をついて、大慌てで帰り支度を始めたのだった。

「ああもう、シオンさんたちとゆっくり話をする暇も無いよ～。とにかくシオンさんはもう私たちの仲間なんだから、これからずっと末永く永遠によろしくね～。」

「あ、ああ・・・。」

「んじゃ皆、そういう事なんで。アデュー！！」

嵐のようなインパクトを残し、颯爽と去っていったアリューシャの後姿を、シオンたちは啞然とした表情で見つめていたのだが。

その瞬間、シオンたちの頭上で凄まじい爆音が響き、直後に盛大な光が夜空を包み込んだ。

思わずシオンたちが夜空を見上げると・・・祭りのクライマックスを祝うかのように、無数の可憐な花火が上空に打ち上げられていたのだった。

「・・・綺麗・・・。」

シオンの左腕を両腕で抱き締めながら、ステイレットが感嘆の声を上げる。

先程までのステイレットの凄まじい威圧感と殺気は、もう完全に消え失せてしまっていた。

そんなステイレットの様子に、シオンたちは安心した表情を見せる。

まさか祭りに来てまでこんな目に遭ってしまうとは、思ってもみなかったのだが・・・それでも最後にステイレットのこの笑顔を見れたのだから、まあ良しとするべきだろう。

こんな静かで穏やかな日々が、ずっと続いていけばいいのに・・・ステイレットと一緒に夜空の花火を見上げながら、シオンたちはそんな事を考えていたのだった。

## 7. 動き出す陰謀

コーネリア共和国の毎年の恒例行事となっている豊穰祭は、今年もまた多少のトラブルはあったものの、何とか無事に成功を収める事が出来た。

街中を彩っていた無数のイルミネーションからは完全に光が失われ、多くの屋台が慌ただしく店じまいの準備を始めている。

祭りの余韻を残した城下町では既に多くの人々が帰り支度を始めており、ほんの数時間前まで沢山の人で賑わっていたのが嘘のように、人々の姿がまばらになってしまっていた。

もうすっかり夜遅くなってしまっており、警備を担当しているコーネリア共和国軍の兵士たちが、寄り道せずに早く家に帰るように促していたのだが。

「・・・以上が依頼内容だ。くれぐれも他の者には絶対に悟られないようにな。」

豊穰祭の2次会を開こうとする客たちが、派手な盛り上がりを見せている酒場において、そんな喧噪から完全にかげ離れた店の最奥のテーブル席において、この国の大臣の1人が対面側の席に座る屈強な男に、書類と札束を手渡していた。

男はニヤニヤしながら書類に目を通し、札束を鞆の中に入れる。

「しかし、よりもよってシオン・アルザードやフレームアームズ・ガール共を殺せとはなあ・・・この国は差別根絶を掲げてるんじゃないのかい？大臣さんよ。」

「エミリア様は理想論や綺麗事を掲げて自己陶醉するばかりで、現実をまるで見ていない・・・あ

の人のせいでこの国は今、各国から強い圧力を掛けられているんだよ。これもこの国を守る為だ。仕方が無いだろう。」

「ま、俺はプロの殺し屋だ。金さえ貰えれば依頼内容はきっちりこなすさ。」

「今払った料金が前金だ。無事にあの5人の抹殺に成功すれば、成功報酬としてその5倍の料金を払う。それで文句は無いかな？」

「安心しな。報酬の額に不満はねえよ。あの5人を殺すのに充分見合った金額だ。」

シオンたちは安息の地を求めて、エミリアが掲げる差別根絶の理想を信じて、命懸けでコーネリア共和国に亡命してきたというのに…それでも尚、シオンたちの事を厄介者だと思っている者も国内に少なからず存在しているのだ。

皇帝ヴィクターが亡くなったとはいえ、ルクセリオ公国とグランザム帝国が未だに戦争中だという事実には変わりはない。

ジークハルトがグランザム帝国に降伏勧告を出したものの、それでも未だに帝国内で対応を検討している最中だから、もう少しだけ待って欲しいとの返答がジークハルトに返って来ている状態なのだ。つまりは戦争は未だに正式には終わってはいないという状況なのだ。

そんな状況において、よりもよってこの両国の軍隊に所属し、互いに敵同士だったシオンたちが、手を取り合って亡命してきた…確かに余計な混乱を招くだけの厄介者だと思われても、仕方が無いのかもしれないが。

それはこの国の絶対的な掟である、差別根絶に背く事を意味するのだが、それでもこの大臣はエミリアの差別根絶の理想自体を真っ向から否定しているのだ。

バンパイアであるマテリアを保護したというだけで、他の国々から強い圧力を掛けられているというのに、さらに厄介者を招き入れてどうするのだと。

「…それで、どうやって奴らを殺せって言うんだい？手段を問わないってんなら、俺に任せて貰えれば今すぐにも殺しに行っ構わないんだぜ？」

「いや、彼らに死んでもらうのは3日後だ。」

大臣はグラスの中のウイスキーを口に含み、ふうっ…と一息入れた。

仮にも人殺しの、しかも何の罪も無い者たちを殺せなどという依頼を、プロの殺し屋にしているのだ。こんな話は酒の力を借りなければ確かに出来ないのかもしれないが。

対照的に殺し屋の男は、殺しが生活の一部になっているからなのか、大臣にニヤニヤと余裕の態度を見せつけている。

「実は3日後の朝に記者会見に出るように、今日彼らに依頼しておいた。今回の亡命の件について他の国々の記者から問い合わせが殺到しているから、記者会見で君たちが直接真相を話してくれてね。そこで大勢の記者たちが見ている目の前で、君に彼らを殺して貰いたい。」

「おいおい3日後って、確かあの帝国に洗脳された嬢ちゃんは、1週間は経過観察が必要だって医師から指示を受けてるんだろ？それなのに随分と無茶させるじゃねえか。」

「どの道殺すんだから、そんな物は関係無いさ。それに暗殺ではこの国の改革は成り立たない。記者会見という場で、世界中が注目している中で彼らに死んで貰わなければ意味が無いんだ。」

記者会見ともなれば、嫌でもライブ中継がリアルタイムで世界中に流れる事になる。

その世界中が注目している状況でシオンたちを殺し、不安分子であるシオンたちを招いた事でこの国に余計な混乱を招いた責任を、議会でエミリアに厳しく追及し王妃の座を降りて貰い、マテリアもこの国から追放する。

そして自分が新たな国王となる事で、差別根絶や絶対中立などという下らない掟を撤廃する…

それが大臣の狙いなのだ。

決して国王の座が欲しい為に、私利私欲の為の計画ではない。  
全てはこの国を真に平和へと導く為なのだ。

「・・・記者会見は3日後の午前9時からの予定だ。手段は問わない。必ず彼らを殺すんだ。」  
「任せておきな。俺はプロだ。報酬に見合った働きはさせて貰うつもりだ。」  
「頼んだぞ。それでは私はこれで失礼させて貰う。」

殺し屋の男に酒の代金を渡した大臣が、何食わぬ顔で店を出ていく。  
まさかシオンたちを殺せなどという話をしていた事など知る由も無く、レジで清算を済ませた大臣を、メイド姿の従業員の女性が笑顔で見送っている。  
その後姿を、殺し屋の男がニヤニヤしながら見つめていたのだった。